

2022年度 L C A 国際小学校 学校自己評価

学校教育目標	重点目標（中・長期目標）	総合評価					
◆社会の一員として個性を生かして、社会に貢献できる人間の育成 ◆世界を舞台に活躍できる人間の育成 ◆生きることの素晴らしさを知った人間の育成	◆グローバルな視野をもち、自己肯定感、Well-beingが高い児童を育成するための教育のさらなる向上	今年度は、本校が開校以来もっとも重要視している子どもの自己肯定感・子どもの幸福をWell-beingという言葉で改めて定義し直し、これからの方向性を定めて教育活動を進めてきた。また、本校が掲げる真の国際人の育成に向け、2021年度より進めてきた英語カリキュラムの全面改訂と国語教育の充実およびそのための研修の仕組みも軌道に乗りつつある。 長年の課題であった地域連携は東京家政学院大学との教育連携協定をはじめ、様々な教育機関との連携の上、これまでにない規模で実現することができた。さらに2022年度は、海外で活躍されていたスクールカウンセラーをお呼びし、児童支援のみならず保護者への支援、教職員の相談などのサポート体制を充実させた。					
	今年度の重点目標	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
	児童がWell-beingを高めるための物の見方や考え方などを知る機会を増やす。	キャンプやスキーなどの学校行事を再開し、子どもたちが多様な体験をする機会を増やした。また、地域の学校との連携を強化する中で様々な人との交流の機会を増やすことができた。今後は子どもたちのWell-beingの状況を継続的に調査し、その成果がどのように表れているか、またどうしていけばさらにより教育活動を行っていきけるかを考えていける仕組みをつくっていきたい。	○				来年度は学校行事の全面的な再開に加え、学校生活においても子どもたちが学び合い、話し合う活動を増やすようにしていきたい。また、子どもたちのWell-beingの状態の調査を定期的に行い、そのフィードバックを教育活動にも反映させていくことができたかと考えている。
	多様な個性の児童に対応できる教育体制を向上させる。	スクールカウンセラーとの密な連携、個別指導の充実によって多様な個性の子どもたちのケアに力を入れてきた。いずれも一定の成果が出たとと言える。また、教科指導においても、今年度より新たに高学年での英語の算数を拡充することで、子どもたちの進路指導においても新たな方向性を切り拓こうとしている。	○				来年度は新たに児童支援コーディネーターを設置し、児童指導担当、外部機関、スクールカウンセラー、少人数指導、ESLの情報を一元化し、より円滑で充実した児童指導・児童支援の体制を整えていきたい。

領域	対象	目 標	評価の観点	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
教 育 活 動	教育課程	特例校としての特色を生かした英語教育のさらなる充実。	英語の新カリキュラム(2021より改訂)に基づき、児童のレベルに応じた単元・プロジェクト計画を各学年ごとに作成できたか。単元計画・プロジェクト計画に評価項目を織り込み、単元・プロジェクトを運営できたか。	各学年主任が中心となり、単元計画をたてる習慣が根付いた。同じ原理を使って他教科の計画も充実し、クラスごとのばらつきや目標を意識しない授業などが大幅に減少した。単元が主な単位となったため、教科書に過度に依存する授業が増えてしまう学年も出てきた。反面、教科書のみでは十分に習得させられないスキル(特に高レベルの英語の読み書き)があることも明らかになってきた。		○			単元や教材のみにとらわれた授業から一歩進めるため、単元計画の前に年間計画の時点から各学年で担当する。教科横断的なプロジェクトを可能にするための校内研修をより充実させる。教科書のみではサポートしきれないスキル習得のため、新たな教材を各学年の標準教材として付け加える。
	教科指導	児童が英語を使う機会をさらに充実させるため、高学年(4年生)にも英語での算数指導を導入。英語算数では、探究的なプロジェクトや対話を重視した授業形式を大切に作るカリキュラム作りにも取り組む。	英語算数の導入が、児童の英語の授業への満足度、または英語力向上につながっていることが見て取れるか。英語とともに算数の力もきちんとつけられているか。	新しく英語算数が導入された4年生の児童は、英語算数の授業をとても楽しんでいるように見えた。児童が英語に触れる機会が増えたことも良かった。カリキュラム作成は、初めての試みなのでペースがうまくつかめず、授業数の取り方などに課題が残った。		○			カリキュラムの見直しを行い、ペースと単元ごとの時数配分の改善を図る。児童にはおおむね好評で、算数の力もつけられることが分かったので、5学年でも英語算数を継続して行う。
	児童支援	教務主任を中心に特別支援教育を専門とする外部機関との連携やスクールカウンセラーとの連携による児童支援の充実。低学年算数の少人数の指導の充実。	教務主任を中心とした児童支援体制がうまく機能したか。低学年算数の少人数指導は充実したものとなったか。	教務主任を中心に特別支援に関する情報やスクールカウンセラーが得た児童に関する情報を集約して児童の状況把握と適切な支援を進めることができた。低学年算数については非常勤講師を2名雇うことで、個別にサポートする体制を整え、指導の充実を図ることができた。		○			
学 校 運 営	との保護者連携	担任・副担任を中心とした保護者との連携の充実に加え、スクールカウンセラーを含めた相談体制の充実。	担任・副担任を中心とした保護者との連携の充実させることができたか。スクールカウンセラーと連携し、学校への相談体制の充実が図れたか。	担任・副担任から保護者へこまめな連絡をするよう促してきたが、日常の些細なことも含めてもう一歩の充実を図っていく必要がある。スクールカウンセラーによる保護者相談はとても機能した。		○			来年度も引き続き、担任を中心とした保護者との連絡の充実を図るとともに、スクールカウンセラーの相談体制の充実を進めていきたい。
	との地域連携	相模原市教委と連携の上、風っ子展等、市内の学校と一緒に取り組めるイベントに参加する。また、他の教育機関と教育連携協定を結ぶなどして、地域での交流の機会を図る。	地域の人や市内の学校とのつながりをもてるような行事やイベントを実施できたか。	風っ子展へはG2,G3,G5,G6が出展し、全学年が鑑賞をした。また、9月には東京家政学院大学と教育連携協定を結び、G1,G2が校外学習で訪れた。G4は校外学習で相原高校を訪れた。来年度も引き続き、交流を続けられるようにしていきたい。		○			今年度は地域の学校との連携を非常に充実させることができたので、来年度も引き続きこの関係を維持し、発展していきけるようにしていきたい。
	研修	社内他部署(英語教育・教材の開発部署)、校内の有資格者による実践的な研修を行う。初任者に対する研修を複数体制で行い、実践的なアドバイスをしていく	社内他部署(英語教育・教材の開発部署)、校内の有資格者による実践的な研修を行えたか。初任者に対する研修を複数体制で行い、実践的なアドバイスをしていくことができたか。	長期休み等を活用した教員研修を計画的に進めることができた。開発課による英語の研修や国語の授業研修などを個別に進めることで実践的なものにするのができた。初任者研修については、途中で初任が退職したことや後期に療養休暇に入る教員が生じてしまったこともあり、後期の研修は滞るところが出てしまった。今年度新たに、ロイロ認定ティーチャー2名、Google 認定教育者(レベル2)1名が合格した。		○			